

フィールドワーク便り

紫のサリーに誘われて

柏 美 紀*

帰国前日。私はシンガポールとの国境にほど近い、マレーシア南端の街にいた。急速な経済発展に伴い数を増すショッピングモールを後目に、私はローカルな屋台を求めて彷徨っていた。炎天下で延々と歩き続け体力が限界に近づいた頃、光を浴びて美しく輝く紫のサリーに目を奪われた。ふと顔を上げると、ゴープラム¹⁾ (Gōpuram) があった。

「付いてきて。」初めて近づくヒンドゥー教寺院の前で躊躇している私に、そのサリーを纏う女性が声を掛けてくれた。

一歩足を踏み入れた先には、見るもの聞く

ものの全てが鮮やかな世界が広がり、胸が高鳴った。「これは何？あれは？」ひとつひとつの疑問に丁寧に答えてくれる彼女との会話は、次第に身の上話になった。

彼女が故郷を離れてこの街へ越してきたのは、清掃の仕事で毎日シンガポールに通うためであった。マレーシアで人口の約7割を占めるマレー系を優遇する政策の影で、インド系は社会・経済的弱者となる場合も少なくないという。

作業着に着替えシンガポールへと向かう彼女を見送る私の頭は、これまで進めてきた調査を忘れ、「インド」でいっぱいになっていた。

新しいテーマで再び現地へ

帰国後、私は「インド」関連の文献を漁るなかで、とある1冊に惹かれた。16世紀頃交易のためにマレー半島に到来したインド系商人の末裔とされる、プラナカン・インディアン (Peranakan Indians) に関する本だ。私は、マレーシアとシンガポールに居住する、数百人ほどのマイノリティである彼ら



写真1 ゴープラム

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 南インド風のヒンドゥー教寺院に見られる塔門。

を研究テーマに据えた。

2020年1月末、まずはプラナカン・インディアン協会のあるシンガポールを訪れた。しかし、事前に協会宛てに送ったメールの返事は来る気配がない。さらに、協会の住所を辿り開いた扉の先にあったのは、古びた映画館…。「どうしよう…」

シンガポールに滞在できる期間は10日ほど。私は少しでもプラナカン・インディアンや現地のインド系に関する情報を収集するべく、まずは近場のヒンドゥー教寺院を訪ねた。

寺院のスタッフを名乗るインド系の男性に迎え入れられた。中を案内してもらっていたが、その話は段々と辻褄の合わない部分が多くなり、私は違和感を覚え始めた。ついに彼は口を割った。「実は無職で、マレーシアから頻繁に訪れては観光客を相手にガイド等をして生活の足しにしている…」

私はその後リトル・インディアへと場所を変えて聞き込みを続けた。観光客の集う場所から少し離れたところに、行列を発見した。無料の食事を振る舞っていると聞き、私は思

い切って手伝いを申し出た。厨房に通されると、インド系シンガポリアンのボランティアスタッフ数名が、数百食をこしらえるために手際良く作業している。

私はシーク教徒の男性と、コンテナ2つ分のオクラの下処理に勤しみながら情報を得た。

「ここには、シンガポールの建設現場などを支える、主に南アジアからの出稼ぎ労働者が多く集う。彼らは少ない収入を少しでも多く故郷の家族に送金するために、自らの生活費は切り詰めている。」

廃棄予定の食材を基にした無料の食事、といっても侮ってはいけない。どの宗教を信仰する人でも味わえるよう動物性食品などは使用せず、かつ健康のために油脂や塩分は控えられた出来立ての美味しい食事、というこだわりっぷりだ。

その日の作業が終わったあと、シーク教徒の男性に近くのシーク教寺院を案内してもらった。そこでも無料の食事が振る舞われ、人々の生活を支えていた。



写真2 厨房



写真3 振る舞われる食事

迫る出国日

目覚めると、外はバケツをひっくり返したような土砂降り。仕方なくオフィス街にある滞在先の目の前の屋台で聞き込みを続けていると、とある貿易会社に勤めるシーク教徒の男性に出会った。私はこれまでインド系といえバリトル・インドシア、と勝手に連想してしまっていた。しかしそこは今、観光客や出稼ぎの人の拠点と化しており、インド系シンガポーリアンはオフィス街にいても少なくないようだ。

その後も情報収集を続けた私はついに、プラナカン・インディアン協会の場所を特定することができた。出国を明後日に控えた日のことだった。

辿り着いた先は、とある会社のオフィス。足がすくんだが、ここまで来て引き下がるわけにはいかない、と扉を開けた。秘書に事情を伝えると、「プラナカン・インディアン協会？ ああ、この会社の社長がやっているのよ」と、出先の社長兼協会長を呼び寄せてくれることになった。緊張が高まる。現れた協会長は私を警戒しつつ、「忙しいんだけど」と不機嫌な様子。ますます脈が早まる私。

それでもこれは私にとって念願の機会。迷惑は承知で部屋に通してもらった。窓を覗くと、これまで見上げてきたマリーナ・ベイ・サンズ²⁾が眼下に小さく見える。私は緊張よりも嬉しさが勝り、これまで調べてきたプラナカン・インディアンの情報や、熱意を伝え始めた。すると、こわばっていた協会長の表

情が和らいでいく。「なんでそこまで知ってるんだ！」と、ついに協会長は笑い出した。

「明日、自宅でパーティーを開くからおいで。親戚や協会メンバーなど多くの人が集まるから、インタビューするといい。」

協会が出版した本やCDなどたくさんのお土産を手に、興奮しながらオフィスをあとにした。

「社長宅のパーティーでインタビュー…」カプセルホテルの一室に戻ってふと我に返ると、これまでに感じたことのないほどの緊張が押し寄せた。不安を少しでも和らげようと準備を進めようとしたが、震える手が邪魔をする。そんな私を救ってくれたのは、ホテルのスタッフの方々だった。いつもどおり気さくに話してくれ、私の名刺のコピー作業を手伝ってくれた。その後バングラデシュから来ていたスタッフのひとりに、勉強を教えてくれないかと頼まれた。これまで満足の教育を受けることが出来なかったという。

いざパーティーへ

プラナカン・インディアンは華人やマレー人とも混血し、独自の文化を築いてきた。マレー語、タミル語、福建語混じりの独自言語はその一例だ。しかしそれを理由に彼らは、現地のインド系社会から仲間外れにされてきた。「民族の違いに囚われないでほしい。皆同じ人間じゃないか。」差別に苦しんできた協会長の言葉には重みがある。

協会長の妻は華人で、この日は旧正月を祝

2) マーライオンと並び、シンガポールのランドマークとなっている複合施設。

うパーティーだった。シンガポール各地から集った、さまざまな民族、宗教、性別、世代の人々が談笑する。住み込みの家政婦の手も借りながら、多様な宗教の食の禁忌に配慮された食事が振る舞われる。

プラナカン・インディアンに嫁いだ華人の女性は、熱心に協会長や高齢者の話に耳を傾けている。その一方で彼女の娘は華人としての意識が強く、「タミル語は学校で少し習ったけど、忘れちゃった。」

博物館の学芸員の姿もあった。「プラナカン・インディアンの文化は、失われつつある。博物館のバックヤードに保存している資料を、ぜひ見に来て。」

帰路は、協会メンバーの夫妻に車で送ってもらった。車を所有できる人は、国土が狭く税金も高いシンガポールにおいてはあまり多くないようだ。

「おかえり」あのバングラデシュからのスタッフが迎えてくれた。緊張の糸が解けてぐっすりと眠りについた翌朝、「未知のウイルス」の影が迫るなかで私はシンガポールをあとにした。



写真4 自宅のパーティーの様子

当初、協会からメールの返事がなかったのは、送付先が古いアドレスのためであった。しかしそのおかげで私は、現地社会において少数派で見過ごされてしまいがちな「インド系」に括られるさまざまな人に会うことができた。関わって下さった全ての方々に感謝したい。

また、シンガポールで新型コロナウイルスは、格差を露呈させた。感染者の大多数が外国人労働者で、彼らの住む劣悪な環境が浮き彫りとなった。彼らの無事を祈念している。

フィールドワーク便り

フィールドワーク便り

かけがえのない居場所

—サードプレイスとしての闇市—

北 嶋 泰 周 *

終身刑を言い渡されたブルックスという老人は 50 年の服役期間を経て仮釈放を言い渡されるが、彼は泣きながらそれを拒否しようとする。シャバに出た孤独な彼は、我々にとっての日常生活についていけず「疲れ果てた、不安から解放されたい」という言葉を残して首吊り自殺をした。これは 1994 年公開の映画『ショーシャンクの空に』で描かれ

た、我々なら誰も行きたいとは思わないであろう刑務所という空間が、ひとりの元老囚人にとっては唯一の「かけがえのない居場所」であったことを印象づけるシーンである。我々には到底受け入れられない場所が、別の誰かにとっては「かけがえのない居場所」となることもある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

近づいてはいけない空間―「釜ヶ崎」「西成」「あいりん地区」

筆者が調査した大阪市西成区の北東部は「日本のスラム街」や「日雇い労働者の街」などと形容され、主に3つの名称で広く知られている。それは西成郡今宮村の小字名に由来し、簡易宿泊所（通称：ドヤ）が密集する空間を指す俗称である「釜ヶ崎」、同じく寄せ場やドヤが位置する西成区から派生した俗称である「西成」、そして1966年に発生した「第五次暴動」を発端として「釜ヶ崎」「西成」のネガティブなイメージを払拭するために大阪府、大阪市、大阪府警によって正式名称として地区指定された「あいりん地区」である[原口 2010]。1960年前後の当該地域はマスコミなどの影響により、貧民街的な性格と反社会性や暴力行為を要因とした俗称としての「西成」が生まれ、この地域一帯を暴力の街である釜ヶ崎という印象を与えてきたとされている[大橋 1961: 9]。筆者が調査中に参加していた食料物資の配布活動をしているNPO団体の代表副理事は「子ど

もの頃から両親に西成は近づいてはいけない場所だと言われてきた」と語っている。その後1970年の大阪万博に向けての建設ブームと労働者確保が政策課題として浮上する中、労働力の流入を見込んだドヤの経営者は三畳の部屋を一畳にして部屋数を増やすなどといった大規模な建て替えを実施し、あいりん地区は家族持ち労働者から単身労働者の街へと変化していく[原口 2010]。しかし1990年代バブル崩壊以降に求人募集が減少し、高賃金な多能工の配置といった生産過程の合理化と土工の若年化が進んだことによって、労働市場から排除された旧来の日雇い労働者たちはホームレス化していく[大倉 2010]。現在では高齢化した労働者たちの自然死に加え、生活保護受給や「あいりんシェルター」などの無料簡易宿泊所などによって、野宿者は旧あいりん総合センター周辺に十数名、三角公園と四角公園に数名ほどにまで減少している。

筆者が毎朝通っていた闇市（通称：泥棒市）では睡眠薬や精神安定剤などの向精神薬や海賊版の違法DVDが販売され、初めて来た若者に対してはひとりの男性が「兄ちゃん、飲み物（睡眠薬）探してんの？ビデオ（違法アダルトDVD）探してんの？」とニタニタ笑いながら声をかけてくる。睡眠薬を求めてくる客が「まだ（薬の効き目が）抜けてないなあ」と呂律が回らない声を出しながら辺りを徘徊し、通行人が少しでもスマホのカメラを向けようものなら「何撮ってんねんボケが！」と中指を立てながら相手を怒鳴り散らして詰め寄る、まさに絵に描いたような



写真1 朝日に照らされる午前6時半の泥棒市

混沌とした空間であった。

孤独な男を救った空間—サードプレイスとしての泥棒市

2021年9月6日の早朝、筆者は泥棒市でひとりの露店商であるI氏（80代男性）に出会った。I氏はあいりん地区ではなく東大阪市に在住し、いつも雑貨やガラクタなどの商品を車で持ってきて販売していた。I氏は定年まで水道の配管工として従事し、奥さんと3男1女の子どものもとに恵まれた。奥さんとは四国遍路の旅をし、4人の子どものために進学させるなど、誰しも想像できる普通の家庭を築いた。しかし55歳の時に奥さんに先立たれ、退職後に夢だったスナックを開業するが失敗して退職金の半分以上を失った。ひとりで年金暮らしをする中で孤独を感じるようになったI氏は酒に溺れ「あの時の自分は完全に頭がおかしくなっていた」と語っている。I氏はある日、天王寺公園を散歩しているといくつかの露店を発見し、それから頻繁に客として天王寺公園の露店商たちと関わるようになった。天王寺公園のホームレスたちが立ち退きに遭うのと同時にI氏はあいりん地区の泥棒市へと移っていく。これまで客として来ていたI氏だったが、次第に自分の家にある雑貨やガラクタを道端に並べるようになり、他の露店商と同じように人とお喋りをするために営業を始めて現在に至る。I氏は以下のように語る。

「家におっても、起きて、テレビ見て、ご飯食べて、風呂に入って、寝るだけになってしまう。ご飯も宅配にしたら、いよいよ外に

出なくなってしまう。こんな生活してたら体壊すやろ？自分も昔はそうだった。やっぱり人と関わって話すことが一番大事だと思うし、だからドロ市に来てるんやで。」

筆者が多くの露店商と話していると同様の語りは頻繁に聞かれた。タバコと衣類を販売している露店商のT氏（40代男性）は商品が全く売れなかった日も「別に金を稼ぎたくて来ているわけではないからね。ただ遊びに行く感覚。みんなと話すのが楽しいだけ」と語る。睡眠薬や海賊版DVDを販売する露天商のH氏（30代男性）は「ここの人たちは独り身が多いでしょ。家と仕事を往復してるだけだと寂しいからさ、こうやってドロ市に来て人と喋りたいって思うんじゃないかな」と語った。実際にI氏に目標売上額を聞くと「350円」と返ってきた。この350円はI氏が泥棒市で営業を終えた後、萩之茶屋駅近くにある行きつけの喫茶店で食べるモーニング代である。筆者は営業終了後にI氏に連れられ、その喫茶店でモーニングを食べながらI氏や他の常連客とさまざまな話を語り合った。ふと気づくと喫茶店に来てから時計の長針は既に2周半も動いていた。

妻に先立たれ、子どもが家を離れ、事業に失敗した結果として酒に溺れてしまった孤独なI氏を救ったのは我々の目には混沌とした空間のように映り、子どもの頃に親から「近づいてはいけない場所」と言われるというあいりん地区の泥棒市であった。筆者も初めてあいりん地区を訪れた時、大量のゴミと小便の匂い、霧のようにタバコの煙が辺りを包み込む泥棒市の混沌とした雰囲気思わず足が



写真2 I氏が行きつけの喫茶店で提供されている
モーニングセット

すくんでしまった。泥棒市を訪れる前までは、露店商が可能な限り経済的利益を追求しているのではと推測していたが、実態は「誰もが平等に扱われ、何よりも会話が尊重され、確実に友達と出会えて、まとまりがゆるやかで、いつも遊び心に満ちている〔オルデンバーグ 2013: 98〕」サードプレイス¹⁾的な空間を露店商たちは創り出していた。その結果、I氏のような「人と関わりたい／お喋りしたい」と思う孤独な人々にとって、我々からするとお世辞でも行きたいとは思えない混沌とした泥棒市という空間が「かけがえのない居場所」になっているのである。

「泥棒市」という空間の変容

泥棒市は著しく変容してきた。いわゆる昔ながらの「西成のおっちゃん」たちが露店営

業をしているだけではなく、I氏のようにあいりん地区以外の地域から車でやってくる人もいればT氏やH氏のような比較的若い人々が新たに露店商として参入している。筆者がよく店番をしていた違法アダルトDVDを販売するY氏（30代男性）は筆者が初めて訪れた7月24日の時点で、露店営業を開始してわずか数週間程度しか経っていなかった。若い露店商たちに聞き取りを行なうと、その多くは何かしら経済的に困窮した結果としてあいりん地区に仕方なく流れ込んで来たわけではなく、高校卒業後に「自由」を求めて全国を放浪しているうちにあいりん地区を気に入った者や、世界各地を貧乏旅行した後と同じような空気感を味わえる場所へ行きたいと考えてあいりん地区を目指した者であった。現在の泥棒市は彼らのような新たな露店商たちによる主体的実践によって再構成されつつある。

「かけがえのない居場所」を見つける

2021年2月、新型コロナウイルスの感染拡大によって深刻化する孤独・孤立問題、それに起因する自殺問題の対策として、日本はイギリスに続き世界で2番目となる孤独・孤立対策担当大臣の職を設けた。ステイホームやテレワークという言葉が囁かれるようになり、家と職場や学校の往復すら出来なくなった。このニューノーマルという名のア

1) オルデンバーグは、家庭としての第一の場所、個人を生産的な役割に変える労働環境としての第二の場所と定義したうえで、サードプレイスを酒場やカフェ、本屋などの「家庭と仕事場の領域を超えた個人の人、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのための場を提供する、さまざまな公共の場所の総称〔オルデンバーグ 2013: 59〕」であるとしている。

ブノーマルな生活形態に馴染めなくなった人々の中には、ブルックスのように自ら命を絶ってしまう人もいたことだろう。ローマ人に従えば『生きる』ということと『人々の間にある』(inter homines esse)ということ、あるいは『死ぬ』ということと『人々の間にあることを止める』(inter homines esse desinere)ということは同義語〔アレント 1994: 20〕であり、我々は他者なくして生きていくことはできない。いつ終わりを迎えるかも分からない生活の中で孤独感到苛まれた時、我々は新たな「かけがえのない居場所」を見つける必要がある。まさにI氏にとっての泥棒市のような「おしゃべり」が生み出す場所、つまり他者を必要とする場所である。そのためには、我々は「空間」というものを改めて検討しなければならない。なぜなら、我々が「サードプレイス」だと認識していたはずのカフェや酒場といった飲食店は「黙食」が進み、他者と関わる機能は著しく減少したからである。新型コロナウイルス感染症の拡大は、我々の空間認識を相対化させるには十分すぎるものであった。

愛する妻を亡くし「孤独」という自己限界に陥った時にI氏は、—我々のように「一般的」な人生を歩んでいた時のI氏にとっては到底受け入れることができなかったであろう—泥棒市という一見すると混沌とした空間

を取り込むことで、同時に立ち現れる「サードプレイス」的な空間を見出し、自己変容とともに自前で生きる世界を構築していった。²⁾ コロナ禍を生き、いつ「孤独」という悪魔に襲われるか分からない我々にとって、もはやI氏の語るライフヒストリーは他人事ではない。今の我々にとって重要なのは、自らがもつ「これがサードプレイスだ」という捉え方は数ある空間認識のひとつでしかないという視点をもつことである。それによって我々は他者を受容すること、そして不可視化されていた空間のバナキュラーな性格を捉えることができ—これまでは到底受け入れられなかった場所を含めて—自らの利用可能な空間を拡張させる契機を生み出す。その視点は、自身が「孤独」状態に陥った際に自らを救う「かけがえのない居場所」を見つける術となるだろう。我々はブルックスという老囚人を通して、刑務所という場所が「かけがえのない居場所」となっていたことを知っているし、それは我々がその術を根源的に備えていることを裏付けていると筆者は信じている。今現在、孤独に押し潰されようとしている全ての人々に「かけがえのない居場所」が見つかり、自前で生きる世界を構築できるように願って。

2) 関根は、他者に身を開いて自己が常にヘテロ化しながら自己が変容・成長していく生き方をヘテロトピア的デザインの生と表現する〔関根 2018〕。I氏の場合、混沌とした天王寺公園の露店や泥棒市、そこで営業する露店商たちといった他者を取り込むことで自己がヘテロ化し、限界状態であった自己から変容・成長した。このヘテロ化は泥棒市のサードプレイス的性格を見出し、I氏の自前で生きていく世界の構築という創発へと繋がっていった。

引用文献

- アレント, ハンナ. 1994. 『人間の条件』 志水速雄訳, 筑摩書房.
- 大倉祐二. 2010. 「放置された不安定就労の拡大とホームレス問題—寄せ場の日雇労働者を野宿生活に追い込んだ要因」 青木秀男編『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』 ミネルヴァ書房, 136–159.
- オルデンバーグ, レイ. 2013. 『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』 忠平美幸訳, みすず書房.
- 大橋 薫. 1961. 「釜ヶ崎の沿革と地域構成」『ソ

シオロジ』 8(3): 5–11.

- 関根康正. 2018. 「下からの創発的連結としての歩道寺院—インドの路上でネオリベリズムを生き抜く」 関根康正編『ストリート人類学—方法と理論の実践的展開』 風響社, 319–362.
- 原口 剛. 2010. 「寄せ場『釜ヶ崎』の生産過程にみる空間の政治—『場所の構築』と『制度的実践』の視点から」 青木秀男編『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』 ミネルヴァ書房, 63–106.

「生まれ」によって奪われゆく子どもたちの夢

—埼玉県の在日クルド人コミュニティへのフィールド調査より—

赤坂知美*

夢をもつということは、将来に対して希望を抱き、今を生きる原動力となる行為だろう。特に子どもの頃は、得意なことや褒められたことをきっかけに、大きな夢をもつことも多いのではないだろうか。後に、さまざまな人々と出会っていく中で、自分が井の中の蛙だったと気づかされることも多々あるが、

恥ずかしながら、私の小・中学生の頃のアルバムを見返すと、将来の夢として「小説家」と書かれている。学校の先生や両親に作文を褒められたこと、そして読書が好きだったことが、小説家を目指すきっかけだった。

その夢は、文才あふれる同級生や後輩との出会いや、小説コンクールに応募して落選が続く中で変化していったが、アルバムにその夢を書いた当時は、努力すれば小説家でも総理大臣でもロックスターでもなんでもなれる、つまり可能性は無限大だと思っていた。

夢をもつことは自由だ。しかしそんな幼心に夢を思い描くことができない子どもたちに、国内フィールド調査で出会った。

「ワラビスタン」フィールド調査

2021年7月から8月にかけて約2週間、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

埼玉県にある「ワラビスタン」を訪れた。日本には約2,000人のクルド人が存在するといわれているが、そのうち1,200～1,300人が埼玉県川口市や蕨市に住んでおり、そのコミュニティは、蕨市とクルディスタンを掛け合わせて「ワラビスタン」と呼ばれている[日経ビジネス2016]。

トルコ国籍のクルド人の移住は1990年代前半から始まる[西中2006:9]。この時期は、それまで日本の産業部門を支えてきた農業部門からの流入者や一時的な出稼ぎ労働者が枯渇し[上林2015:225]、来日する外国人労働者が本格的に増え始めた時期と一致している。日本の労働力不足を背景に、クルド人男性のほとんどは建物の解体作業という肉体労働に従事している。しかし出会ったクルド人になぜ日本に来たのか理由を聞くと、故郷で迫害されて身の危険を感じたため、自由と安全がほしかったため、もしくは賃金稼ごのためのいずれかだった。外国人労働者としてだけでなく、難民としての側面も強いことが、上述した来日理由からわかるだろう。



写真1 在日クルド人家庭訪問時

そのため、来日後に難民申請を行なうクルド人も多い。しかし、蕨市の在日クルド人支援団体「クルドを知る会」によると、トルコ国籍保持者の難民認定率は本稿を書いている2021年10月時点でもゼロである。日本におけるクルド人の在留ステータスは、①日本人と結婚して配偶者ビザをもつ者、②在留特別許可をもつ者、③仮放免のいずれかだ。日本への長期滞在許可を取得しないまま入国し、オーバーステイ状態で非正規に滞在し続けるクルド人も多い中、生まれたクルド人の子どもには無国籍の者もいるという。

日本語教室で出会った子どもたち

在日クルド人支援団体「クルドを知る会」は、個別の家庭訪問に加えて、日本語教室を毎週日曜日に行なっている。在日クルド人が日本にやってきた時期はさまざまだ。10年以上日本に居住している者もいれば、昨年やってきた人もいる。居住歴の長短にかかわらず、その多くは日本語の読み書きができず、話すことさえ苦手な者も多い。日本に10年以上いるにもかかわらず、ひらがな・カタカナでさえ読めないことも珍しくない。また、特に女性に、簡単な挨拶以外、日本語をしゃべることができない人が多い。男性の場合、解体作業を通じて日本人と関わるとはいえ、現場では日本語を読み書きする能力が向上する機会はなく、肉体労働のみを求められる。また、女性の場合は、家事・育児で家から出ることがほとんどなく、外国人への偏見や差別もあって地域のコミュニティに参入することができないため、日本語を話す機会が

ない。一方で、子どもたちは日本の学校に通うため、両親より巧みに日本語を操る。そのため、私がインタビューする時などは、主に子どもたちが通訳してくれた。

日本語教室における参与観察では、私はクルド人の両親にひらがなとカタカナを教えながら、手が空いた時に子どもたちに日々の学校の様子を尋ね、夏休みの宿題と一緒に解くなどした。ボランティアスタッフの中で、子どもたちの年齢と最も近い私は、学校でのムカつく話、友人関係や恋愛の話などで盛り上がった。「私もこんな時があったな」と少し懐かしくなりながら話す中で、驚いたのは子どもたちの多くが夢をもっていないことだった。いや、「もつことができない」という表現の方が正しいのかもしれない。

サッカーが得意なS君に将来の夢を聞くと以下のような答えが返ってきた。

「将来の夢はあるの？」

「うーん…。べつに…」

「でも、サッカー好きなんでしょう？」

「サッカー選手になればいいけれど、将来どうなるかわからないから。」

子どもたちには、サッカー、陸上などのスポーツや、勉強など、得意なこと、好きなことはある。しかし、両親のいずれかが日本人でない限り、彼ら・彼女らが日本に無期限の滞在ができる在留ステータスを得ることはできない。現状は「家族滞在」として日本に滞在しているが、子どもたちの両親が在留許可を得ていたとしても、6ヵ月ないし1年ごとに更新が必要な「特定活動」もしくは「特定技能」の資格であり、半年後や数年後、日本



写真2 「クルドを知る会」日本語教室ボランティア時の様子

にいるかどうかわからないのだ。特に、仮放免中もしくは入国管理局に收容されている家族をもつ者の中には精神的不安が大きく、学校でのいじめも重なって不登校になった者もいた。

重なるブルネイの無国籍者

子どもたちの話を聞く中で、3年前にブルネイ留学中に会った無国籍の友人を思い出した。ブルネイ国籍を保持するのは、国家が定義する7つの民族を包摂した「マレー人」であり、血統主義的な国籍法が採用されている[Brunei Nationality Act 1961]。そのため、ブルネイで生まれながら7つの民族以外の人々の中には、無国籍となってしまった者たちが現在もなお存在している。

そのうちのひとりである私の友人は、日本が大好きで、日本への留学を夢見ていた。しかし、「無国籍」というステータスゆえに海外への長期滞在を許可されず、奨学金を得る

こともできなかった。日本への留学も、日本で働くという夢も、あきらめざるを得なかったと残念そうに話してくれた。ブルネイの無国籍者たちの様子が、クルドの子どもたちと重なった。

法的保護外の子どもたち

「国民一領土一国家」を三位一体とする国民国家から放逐された無国籍者、難民について「人権のアポリア（行き詰まり）」と述べたのはアーレント [アーレント 2017: 303-328] だが、諸権利が与えられずに法的保護外の「剥き出しの生」に置かれた人々の中でも、最も強くその影響を受けるのは幼い子どもたちではないか。

どの国に、どの民族に、どの国籍をもって生まれるかによって、子どもたちの将来を決めてしまっているのか。生まれによって規定された「在留資格」や「国籍」によって、将

来の可能性が狭められてしまう様は、ブルネイだけではなく日本においても存在した。子どもたちの幼心に夢さえもつことができない環境下で、生きる意味や希望を見出すことができるのか。彼ら・彼女らの将来を思うと、胸が締め付けられる。

引 用 文 献

- アーレント, ハンナ. 2017. 『新版 全体主義の起源 2—帝国主義』大島通義・大島かおり訳, みすず書房.
- 上林千恵子. 2015. 『外国人労働者受け入れと日本社会』東京大学出版会.
- 西中誠一郎. 2006. 「いまだ悪夢から覚めることができない—新しい難民認定制度と難民申請者の現在」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報 2006』: 9-15.
- 日経ビジネス. 2016. 「なぜ埼玉県南部にクルド人が集まるのか?」 <<https://business.nikkei.com/atcl/opinion/15/221102/042000211/?P=5>> (最終閲覧日: 2021 年 12 月 3 日)
- Brunei Nationality Act. 1961.

ウシと暮らす

山 本 始 乃 *

ウシとの縁

記憶にある頃から筆者の身近にはウシがいた。家の周りには多くの酪農家が生活をして

おり、実家では肉牛用のウシを飼養していたこともある。小さい頃、友だちと外で遊んだり散歩に行ったりするとき、行き先には必ず

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ケニアで撮影した家畜の写真

とっていいほど牛舎が含まれていた。鬼ごっこでは、ウシの間を駆け抜け、子ウシと触れ合ったりもした。ウシに囲まれた生活を送りながら小学生になったある日、授業で世界の子どもの生活を調べた。私はたまたまアフリカの子どもたちを担当した。当時、学校が大嫌いだった筆者は、「学校に行きたいのに行けない」子どもたちを見て衝撃を受けた。どうしてもアフリカに行きたい。彼らに会いたい。何か手助けがしたい。そう思いつづけて大学ではアフリカの研究をしている先生のゼミに入り、3年生で念願のアフリカ渡航を果たした。場所は、ケニア北東部の乾燥地域にある遊牧民の村。家畜と暮らす人についての研究をする目的だったが、1ヵ月という短い滞在だった。フィールドワークは衝撃のオンパレードだった。願いは叶ったものの、筆者のアフリカ熱はおさまらず、大学院でアフリカに行くことを夢みた。しかし、コロナウイルスの蔓延により渡航できない状況がつづき、国内での研究に切り替えた筆者は、またもやウシと暮らす人の研究をするようになった。

家畜と生きる

ヒトは、家畜と異なる種間の共生関係を結んで生きている [田名部 1991]。ケニア北東部乾燥地域の遊牧民はラクダやウシといった大家畜と、ヤギなどの小家畜を飼養している。乾燥地域では、人間が食べることでできない資源が多数存在しており、家畜が牧草や水を消費する。こうして家畜を介することで、人間が直接摂取できない資源がミルクや肉として人間の栄養になる。また、お金や婚資にもなる重要な財産にもなる。

遊牧民の子どもたちは、幼い頃から家畜と触れ合いながら暮らしている。家の周りや村には家畜がいて、ミルクや肉だけでなく、毛皮や血さえも利用する。筆者が訪れた村には学校があったが、学校に通う子どももいれば、学校に通わずに家畜の世話をする子どももいた。また、学校に通っていないながらも、将来の資産となる家畜を手に入れるために、学校に通うのではなく家畜の世話をしたいという子どももいた。田曉潔 [Tian 2016] によると、牧畜民の子どもは3歳頃から親や年長の子どもたちの活動を見て、家畜管理や遊牧の方法を学習するという。日常生活の中で牧畜民としてのノウハウや判断力を身に付けていく。幼い頃から家畜管理の仕組みの中に組み込まれて生活しているのだ。

私が訪れた鳥取や北海道の酪農家でも、子どもの日常の中にウシが組み込まれていた。散歩、遊び、手伝いなどウシと関わる機会は多い。ただ、小学生の頃まではそのような関わりをもつことが多いものの、中学生になると家畜との関わりは減少していくように感じ



写真2 放牧中のウシたち

る。同じ酪農であっても、家族経営の方が、子どもたちと家畜の関わりは深い。

家族経営の酪農家では、小学生の子どもがいれば、放課後に牛舎へ行き、可能な手伝いをする。どのような手伝いをするかはウシの飼養形態にもよるが、共通してみられたもののひとつはふんかき¹⁾であった。放牧をしている場合には、ウシ追²⁾いも手伝っていた。しかし、手伝いは毎日かならず行なわれるわけではなく、子どもたちの気分しだいである。家で過ごしたければ家で過ごすこともある。手伝いをしていないときには、子どもたちは牛舎や家の周りで遊んだり、学校の宿題をして時間を潰していた。家と牛舎が少し離れている場合には、子どもたちは、親の仕事が終わるまで牛舎で待っていた。小学生やもっと小さい子どもの中には、ウシを怖がって牛舎に入れない子や、少し怯えながら手伝いをする子がいた。

中学生になると、部活動や学校の課題に追われて帰宅時間が遅くなるため、牛舎に近づく時間はほとんど無くなる。そのため、子

もたちの中で最もウシと近い距離にいたのは小学生であり、牛舎へ訪れる頻度は大人に次いで多かった。

家畜に生かされる

筆者がフィールドで出会った人は、ウシは2つの生産物——ミルクや肉などの食物、そしてふん尿——をヒトに与えると言った。ミルクや肉は私たちヒトに直接恩恵を与えられる。一方、ふん尿は、堆肥となって土壌を豊かにし、農作物などの栄養になる。堆肥は近所の農家さんとも共有され、地域全体で活用されていた。農家は百姓ともいわれるように、生産物に関する知識の他にも、さまざまな知識が必要になる。たとえば、ウシの酪農家であれば、ウシが食べる草に始まり、草が育つ土、土の中の微生物、また天候についての知識も必要である。ウシが好きというだけで酪農家になれる時代ではない。経営や遺伝子などの情報や知識も必要である。さまざまな知識を駆使しながらウシの管理をすることで、生計を成り立たせている。

家畜の存在は、酪農に関わる作業以外にも、農家の日常の中に組み込まれていた。たとえば、食事である。ウシに子どもを産ませることで私たちはミルクを頂いているが、出産後数日間に搾乳されたミルクは出荷することができない。そのため、ミルクを家に持ち帰って初乳豆腐にすることもあった。また、毎日ミルクを持ち帰り、おやつやご飯、ヨー

1) ウシのふん尿を掃除する作業のこと。

2) 放牧地にいるウシを牛舎まで誘導する作業で、牛群の後ろから追いかける。



写真3 どうしても食べたいとお願いして作ってもらったミルク鍋

グルトにしたり、チーズを作ることもある。それらは他の家畜の餌になることもあった。

ある日、私は、ホームステイ先のご主人、別の農家さんと3人で話をしたことがあった。すると、ヒツジ農家の方が「(家畜に)生かしてんのか、生かされてるのか分からないよね」とつぶやいた。酪農家への滞在や今までの経験から、私はヒトがウシを管理して生かしていると思い込んでいた。しかし、2人のやりとりから、ウシがいることで生活が成り立ち、また酪農家は可能な限りウシに合わせて生活をしていることに気付いたのだった。酪農家はウシを生かしているのではなく、ウシがいることでウシの生産物を頂いており、人々はウシに生かされていた。

飼養されているウシ、毎日搾乳されるウシ、子ウシと引き離されて鳴くウシ、乳量が少なくなると廃棄されてしまうウシ。私たちが命を頂く背景には、たくさんのウシがおり、それぞれにさまざまな出来事がある。酪農家と暮らしながらウシと農家たちの関わりの現実を見て、知って、私は大好きな牛乳も



写真4 小さい頃からずっと飲み続けている白バラ牛乳

牛肉も受け付けなくなってしまった。ある人は言った。「その事実を受け入れてこそ、命を頂いて生きていくということ。」

アフリカに滞在していたときに、ヤギを解体してみんなで食べる機会があった。目の前で解体・調理されることで、命を頂くことの実感が湧く。だが、日本ではスーパーに行けば加工されている肉を簡単に手に入れることができる。毎日のように日常の中に組み込まれていたウシ。しかし、そこにある背景を知ったとき、当たり前のように食べ、当たり前のようにミルクを頂いていたことに疑問を覚えた。

「当たり前」からの脱却

私は、ウシと日常的に関わる距離にいながら、命を頂いていると感じることはできていなかった。また、幼い頃から家畜に関わっていた経験もあって、初めに訪れた調査地では、新鮮なこと、興味深いことを見つけることに苦勞した。

鳥取における1ヵ月の滞在では、幼い頃か

らウシと触れ合ってきた筆者には「当たり前」のことばかりだった。しかし、それ以上に子どもが牛舎に遊びに行く姿や、ウシを飼養している人々の生活に新鮮な驚きは感じられなかった。調査をするために来たのに、何も「発見」することができずに淡々と過ぎていく日々思い悩む。

ある日、県外から鳥取県内に嫁いだ方たちと話していた。田舎だからその人との繋がりや、距離の近さについて話をしてくれた。全く気付かなかった視点や悩みばかりであった。新鮮さを感じさせなかったのは、幼い頃からウシと触れ合ってきたからだけではない。筆者自身が鳥取県の田舎出身であり、幼い頃からそのような関係性に組み込まれて生きてきたからでもあった。

一方、北海道では色々な気付きがあった。人々の関係性、取り組み、考え方など、その地域で行なわれている「当たり前」は、地域の中の人間にはみえないことも多くある。むしろ、他の地域から来た人間だからこそ、観察でき、分かることがあり、その土地の強みに気付くことがある。田舎では若年層が都会に出て行き、過疎化が進んでいる。地域の人々はそれを必死に止めようとする。だが、そこに居続けてもみえないものがたくさんある。外の人間になって初めて、地元や地域を俯瞰的にみて評価することが可能となる。

諦められないアフリカ

アフリカのことが頭になく、日本のことは全く興味がなかった私は、コロナ禍のためいやおうなく実施した国内での調査を通し

て、地元や日本のことを知る大切さに気付いた。田舎では、年配の方たちがお茶を飲みながらガラケーが無くなることを議論していた。また、若者が都市部に流れていくことを必死に止めようとしている人たちもたくさんいた。これは筆者自身が田舎から離れた場所で生活を送っているからこそ、心に残ったことでもある。普段の生活の中でうすうすは感じてはいるけれど、実際に具体的な関係の中に組み込まれてみないと実感できないこと、考えつかないことがたくさんあった。

どれだけ日本のことに興味をもって、まだ知らないことがあると分かっても、しかし、まだアフリカを諦めることはできそうにない。大学院では、アフリカに行けると信じて疑わなかった2年前。今でも、いつか絶対にアフリカに行くんだと心で思っている。だが、アフリカに行く前に日本のことをもっと知ることは必要だったのだと思う。「コロナのせいで」とは誰でもいえる。そうではなく、「コロナのおかげで」日本で起きていること、田舎で人々が抱えている課題について知ることができた。いつかのアフリカを夢に見ながら、今日も日本のことを必死に考えている。

引用文献

- Tian Xiaojie. 2016. Day-to-Day Accumulation of Indigenous Ecological Knowledge: A Case Study of Pastoral Maasai Children in Southern Kenya. *African Study Monographs* 37(2): 75-102.
- 田名部雄一. 1991. 「ヒトと他の動物との共生の歴史」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』5: 135-172.

ネパール・カトマンズにおける シングルマザーとの邂逅をめぐって

川 口 千 尋*

カトマンズに生きる女性たちの語りを求めて
フィールドワークを始めて1週間が経ったある日、ボランティア先の学校¹⁾での朝礼や授業を終えると、同行していた地域のNGOの代表を務める女性が次のようなことを尋ねてきた。

「これから身寄りのない老人の介護をしている知り合いのNGOを訪ねて、そこで働いている女性の話聞いてみない？あなたはいろんな女性たちの人生について聞きたいって言っていたでしょう。」

筆者は午前の授業を終えて少し疲れていたが、またとない機会に嬉々とした表情を浮かべて彼女についていった。



写真1 介護施設の建物

到着したのはコンクリート造の3階建ての建物だった。その日のカトマンズは朝から厚い雲が空を覆う雨季らしい天気だったが、午後には太陽の強い光が差し込んできて気温が急激に上昇し、建物の中に熱がこもっていた。外を眺めたりベッドに横たわったりして自由に過ごす老人たちの近くで、少し汗ばんだ数人の女性たちが談笑しており、笑顔で私を迎えてくれた。この人たちが団体の職員の女性たちである。廊下の奥には生まれたばかりの赤ん坊を抱いた若い女性がおり、少し警戒したような表情で私のことを見つめていた。筆者は彼女の強い視線にたじろいで、すぐにその場から立ち去ってしまった。

さまざまな境遇の女性や老人が住まう場

筆者が急遽訪ねることになったこの団体は、2003年に地域の女性によって設立された小規模なNGOであった。同団体が運営する施設では、身寄りのない老人や家庭内暴力の被害に遭った女性、未婚での妊娠・出産を経験して村八分になったシングルマザーなどが共同生活を送っていた。身寄りのない老人

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 筆者は2019年の夏、ネパールの学校で演劇や芸術の授業を行なうボランティアをしていた。

や女性の衣食住はもちろんのこと、シングルマザーの子どもたちの学費も同団体が工面している。ネパール語のみで活動内容を発信しているため、²⁾ 外国の支援者と繋がることができず、資金繰りが厳しい状態であるという。

本稿では、この団体の職員の女性の中でも、「シングルマザー」であるという共通点をもつふたりのライフ・ヒストリーに触れながら、女性たちにとってこの団体がどのような存在なのか明らかにしていきたい。また、ふたりの語りをとおしてネパールにおいてシングルマザーとして生きるということの意味をうかがい知ることができるだろう。

マヤさんのライフ・ヒストリー

1人目の女性は、代表の秘書として働くマヤさん（仮名）である。現在36歳で19歳と16歳の息子がいる。彼女はカトマンズの東側にあるカブレパランチョーク郡出身で、両親は農業を営んでいた。インドとの国境に近い南部のチトワンに引っ越してからは、米

などを作っていたという。実家について話していた彼女は、学校のことについて質問が及ぶと、その表情を曇らせた。

「私は公立学校に通っていました。でも15歳までです。私は嫌だったのですが、家族が私を結婚させました。」

彼女の夫は同郷の人であったため、家族が住むチトワンからカブレパランチョーク郡に戻ることになったという。結婚から7ヵ月が経った頃、マヤさんは夫とともにカトマンズに引っ越し、小さな商店を始めた。

移住労働の機会と豹変した夫

「結婚の1年後に長男を出産しました。3年後には次男を産みました。2人目の子どもが生まれた頃から、夫との関係が悪くなり始めたので、私は家族のもとを離れて国外で働こうと思うようになりました。」

ネパールは1990年の民主化以降、多くの移住労働者の送り出し国となってきた。国内総生産の32%は移住労働者による送金に支えられており、女性による送金もそのうち11%を占めている [World Bank 2016]。マヤさんもイスラエルの介護施設で働きながら家族に送金をしていたという。不在の間は実母に子育てを任せ、夫が手伝うという約束だった。しかし、しばらくして彼女が送金したお金を夫が浪費しており、さらには浮気もしているという連絡が入ったため、彼女は稼いだお金の送金先を実家に変更した。



図1 ネパールの地図

2) 代表、副代表をはじめとした職員の女性たちは英語を用いて情報発信をすることができないため、Facebook 上でのネパール語による情報発信によってネパール国内のドナーを獲得しようと画策していた。

「夫は私の収入を得られなくなったことに憤慨して、前のようにお金を送らなければ息子を殺すと何度も何度も脅しの電話をかけてきました。」

帰国と離婚，そして現在の仕事との出会い

5年間の移住労働を経て帰国した彼女は、帰国後半年の間必死に働いて離婚のための資金を貯めたという。マヤさんは彼女自身のように仕事をもつ独立した女性でも、シングルマザーになるという決断には勇気がいると話していた。金銭的に可能だとしても、ネパール社会の家父長制のもとでは「父のいない子ども」という存在は厳しい立場に置かれるためである。³⁾

それでも離婚を決断した彼女は、2015年のネパール地震発生時にイスラエルの支援団体の通訳をしたことがきっかけとなり、現在のような福祉団体における仕事に携わり始めたという。その後、彼女は化粧品販売のビジネスも始め、ひとりで家計を支えてきた。長男はオーストリアの大学に進学し、次男も地元の高校に通って勉学に励んでいるようだ。

リタさんのライフ・ヒストリー

2人目のリタさん（仮名）は現在34歳で、同団体において調理や老人たちの介護を担当している。彼女はオフィスの奥にあるソファに腰掛け、最近幼稚園に通い始めたばかりの息子をあやしていた。



写真2 リタさんが働く調理場

リタさんはカトマンズの北東に位置するシンドゥパルチョーク郡出身で、農業をしていた両親と姉、弟と一緒に学童期を過ごした。しかし、彼女が14歳の頃、母の病気の治療のために家族全員でカトマンズに引っ越すことになったという。

最初の結婚と再婚相手の暴力

父と姉が働いていたため、彼女と弟は学校に通い続けることができたが、経済的には厳しい状況が続いた。そこで家庭の負担を減らすためにリタさんが結婚することになったのだという。結婚相手は猜疑心が強い人で、彼女が少しでも他の男性と話すと言を疑ってくるような人だった。子どもがいなかったということもあり、彼女はその夫と別れることができたが、次に紹介されたヘタウダに住む新しい夫からは暴力を振るわれた。そのことを義母に相談すると、義母もリタさんのことを叩くようになったという。4～5ヵ月経つ

3) 田中 [2017: 108-117] も、夫からドメスティック・バイオレンスを受けて離婚を望んでいた収入のある女性が、周囲から「子どものためにも離婚すべきではない」、「夫の名誉が傷つく」、「世間体を失う」などといった批判を受けたという事例を挙げている。

たのちリタさんが息子を身籠ると、もう自分のもとから去ることはないと思ったのか、夫の暴力はさらにエスカレートしていった。

息子が生まれた後に、リタさんはカトマンズで働くと言い出した夫についてまた引っ越しをすることになった。カトマンズへ移った後、夫は近くに住んでいた彼女の家族にお金を無心するようになったという。彼女が野菜の売り子をして稼いだ少ないお金も寝ている間に全て夫に盗られてしまった。

息子との離別と思いがけない懐妊

そうした厳しい生活を見兼ねた実父が、彼女の離婚に手を貸したが、まだ幼かった息子は夫の家族に引き渡さなければならなかった。彼女はその後、もう一度再婚したが、新しい結婚相手の家族は彼女を家事労働者やホテルの従業員として働かせて搾取したため、相手の家族の目を盗んでカトマンズに逃げてきたという。

カトマンズに戻った彼女はバスターミナルの近くにあるゲストハウスの仕事を見つけ

た。住み込みの仕事だったが、その住居と労働環境は劣悪だったという。ある夜、ナイト・クラブ帰りと思しき酔った男性客がやってきた。

「私はチェックインの手続きを始めようとしたのですが、彼の様子は普通の客と違っていました。その男は、妻を亡くしたという身の上話を始めました。彼は私の手を握って『君はきれいだ』と言いました。その時は私以外に従業員はおらず、誰かを呼んで助けを求めすることもできませんでした。そのままその男は、受付のカウンターの横で、私をレイプしました。」

彼女はそのような環境では働けないと思い、新たなゲストハウスでの仕事を見つけた。ここでは「ディディ」⁴⁾と呼べるような良い友人にも会うことができ、少しは落ち着けるはずだった。しかし、その頃に妊娠が発覚したのだという。中絶手術の費用が払えなかった彼女はその子を産むことにした。ディディが寄る辺のない妊娠中の彼女を現在働いている団体に紹介し、彼女は子育てをしながら介護の仕事に携わるようになった。



写真3 バスターミナルの近くの風景

ふたりのシングルマザーの語りから

最初に紹介したマヤさんは、仕事以外の自己実現の一環として介護の仕事をしている一方で、リタさんにとってこの団体は生活の場となっている。リタさんのように性暴力を受けた女性などは、家族の *izzat*（社会での価値／名誉）を傷付ける存在であるとして親族

4) ネパール語で姉を意味する。年上の親しい女性や従姉妹などを呼ぶ時にも用いられる。

や所属していたコミュニティから排除されてしまう [Poudel 2011]。実際に彼女も「父親の分からない子ども」を連れて家族のもとに帰るのはむづかしいという。

2021年6月、ネパール政府は市民権法を改正し、父親を特定できないシングルマザーの子どもにも市民権を付与することを決定したが、⁵⁾ 市民権の取得には地方自治体が発行する出生証明書が必要となる。父親が特定できない子どもの出生証明書を発行する場合には地域の人による推薦状の提出が義務付けられているが、未婚の母に対する偏見があるため、推薦状を作成する人は少ないのではないかと指摘されている [South Asia Monitor 2021]。

筆者はこうしたニュースを耳にするたび、必ず冒頭に記した強い視線の彼女のことを思い出す。彼女は調査当時20歳だった筆者と同年であり、筆者が施設を訪れる数日前に保護されたシングルマザーだった。当時、今よりもさらに不勉強であった筆者は、名も知

らぬ彼女のことをただ気の毒に思うことしかできなかった。今度は同い年の友人として、もしくは協働できる同胞として、彼女と「出会い直す」ことができるだろうか。いつか彼女のような女性の生きざまを、共鳴できる姉——すなわち「ディディ」のストーリーとして日本の若い女性に紹介できるように研究を続けたい。

引用文献

- Poudel, Meena. 2011. *Dealing with Hidden Issues: Social Rejection Experienced by Trafficked Women in Nepal*. PhD dissertation, Newcastle University, UK.
- South Asia Monitor. 2021. 〈<https://www.southasiamonitor.org/nepal/children-single-mothers-nepal-might-still-face-problems-getting-citizenship>〉 (2021年11月29日)
- World Bank. 2016. *Migration and Remittances Factbook 2016*. Advanced Edition 3rd ed. World Bank Group.
- 田中雅子. 2017. 『ネパールの人身売買サバイバーの当事者団体から学ぶ一家族、社会からの排除を越えて』上智大学出版.

5) 同改正法が適切に施行された場合、約68万人の子どもたちがネパールの市民権を得ることになるという [South Asia Monitor 2021]。